

スマートフォンを使用した授業実践の報告

—自己の客観視から発表態度を省みる試み—

石田 莉奈
ISHIDA Rina

1.はじめに

1年後期に開講される「日本語表現 T2」（一部学部必修）では、パワーポイントを使用した15分間のプレゼン発表を課している。プレゼン発表は、4名程度のグループに分かれ、テーマ設定から資料収集、アウトラインの作成、論点抽出などの発表準備期間を経て、授業の第8週目から実施している。その過程の中で、学生にはあらかじめ「グループ発表の評価基準（ループリック）」を提示し、発表内容のみではなく、話し方やアイコンタクト、身振り手振りなどの発表態度も重要であることを説明している。しかし、学生はスライドやレジュメなどの資料作成に注力するため、発表態度にまで気が回らない場合が多い。また、発表資料さえ完成すれば口述はどうかになるだろうと楽観的に構えている学生もいる。したがって例年、口述原稿を作成するものの、それを単純に音読するだけの発表になりがちである。こうした状況を改善するためには、プレゼン発表中の態度や話し方が聞き手の印象を左右することを理解し、発表者自身が自らの発表態度を客観的に見て不足する要素に気付くことが必要である。

以上をふまえ、学生の発表態度の撮影とその視聴を取り入れた授業を設定し、本番発表前に学生が自身の発表態度について省みる時間を設けた。また、撮影には、受講学生全員が所持していることを確認し、スマートフォン（以下、スマホ）を使用した。スマホは学生にとって身近な機器であり、操作方法の説明が不要で取り組みやすいという利点がある。さらに、複数名が同時に動画撮影できることから、ビデオカメラを用いるよりも作業時間を短縮できる。個人が所有する機器で動画の視聴、保存が可能なことも利点だ。本稿はそうしたスマホの利点を生かしておこなった授業実践の報告である。なお、実施クラスは人間情報学科9名、スポーツ・健康医科学科9名の計18名が在籍する選択学部クラスである。

2.学修活動の流れ

2.1 導入

本章では実際におこなった授業の内容について、順を追って説明する。授業の導入では本時の目的を確認した。

設定した目的は、①口頭発表の注意点について理解する、②自身が話す姿を見返しその改善点を考える、の2つである。また、「グループ発表の評価基準（ループリック）」を提示し、評価基準が、①読解、②構成、③実証・論証、④レジュメ、⑤口述表現、⑥その他、の6区分から成ること、⑤口述表現には「話し方」「発表態度」の観点が含まれることを確認した。以上の導入を通して、本時が話し方および発表態度のスキルを向上させるための授業であることを学生に意識づけた。

2.2 展開

2.2.1) 他クラスの動画を視聴する

展開では大きく3段階に分けて授業を進めた。第1段階では、プレゼン発表における発表態度や話し方の重要性に気付くことを目的とし、他者の発表動画を視聴した上で評価できる点と改善点を指摘させた。なお視聴した動画は、同じ「日本語表現 T2」の授業において必修学部のクラスがおこなったプレゼン発表の中から、話し方や発表態度の指摘がしやすいものを選んでいく。ここでは、それらの指摘から学生の気付きを確認したい。

学生から挙げた評価できる点の中では、「声大きい」「話し方が丁寧」など、ループリックの「話し方」の項目に該当する内容が最も多く、18名中10名の学生がそこに言及していた。また、学生から挙げた改善点の中で最も多かったのは、「手元の原稿ばかり見てアイコンタクトがない」（17名）という記述であり、「ジェスチャーがない」（6名）、「抑揚がなく棒読み」（5名）、と続いた。ループリックに基づけば、アイコンタクトやジェスチャーは「発表態度」、棒読みは「話し方」に分類される内容であり、評価できる点、改善点共に、おおむね予測通りの反応であった。特に、原稿の音読によってアイコンタクトが減少することに18名中17名が言及したことから、こちらが留意させたいポイントにほぼ全員が気付けたといえる。

2.2.2) 自身が話す姿を撮影する

第2段階では、第1段階で挙げた改善点を意識した上で、自分が発表する姿をスマホで撮影させた。ここでの手順は以下の通りである。

- ① 4名程度のグループに分かれる。
- ② 配付された口述原稿例に基づき話す内容をまとめる。
- ③ グループ内で役割を決める。
- ④ スマホを使用し、動画撮影をおこなう。

なお②で口述原稿を用意したのは、第1段階での気付きをふまえ、手元の原稿を音読することによってアイコンタクトが困難になると学生に実感させるためである。

また、③においては話し手、聴衆、撮影者の3つの役割を設けた。聴衆を設けた理由は、話し手がカメラ目線になるのを防ぎ、アイコンタクトを意識的におこなえるようにするためである。ここではカメラの一点を見るのではなく、聴衆と視線を交わすことを意識して話すように指示した。

2.2.3) 撮影した動画を視聴する

第3段階では、撮影した動画をグループで視聴し、評価できる点と改善点をまとめさせた。コメントから、学生が何を意識して発表をおこない、何が不足していると気付いたかを確認していく。

まず、評価できる点では「アイコンタクトを意識して話せた」という記述が6名と最も多く、「ジェスチャーを交えて話せた」を含め、ルーブリックの「発表態度」に関連するコメントが計9名であった。また、「抑揚をつけて話せた」、「はっきりと聞き取りやすい声で話せた」など、「話し方」に関するコメントが計10名となった。このことから、第1段階での気付きを実践に生かし、ある程度それが体現できたことが分かる。

一方、改善点においてもアイコンタクトに関連するコメントが10名と最も多い結果となり、ジェスチャーに関するコメントと併せると、「発表態度」に言及するものは計17名であった。評価できる点よりも改善点として「発表態度」を挙げる学生が多いことから、気付きを得て意識をしても、実践が難しい項目であったということが分かる。また、「話し方」については計11名のコメントがあったが、声の大小や話す速度への指摘が9名と大半を占め、評価できる点における声の抑揚や明瞭さという着眼点とは異なりを見せた。つまり、「話し方」に関してはある程度実践ができた上で、さらに良いものとするための改善点を書いているということである。

その他、話し方や発表態度のみならず、「表情が硬い」、「姿勢が悪い」、「前髪が暗い印象」、「原稿を持つ位置が高くて顔が見えない」、「読み間違えた後の表情が悪い」など、各自の状況に合わせた具体的な改善点が挙げられた。このことは自己の姿を動画によって振り返ったからこそ得られた成果であるといえるだろう。

2.3 終結

最後に、本時の振り返りとして以下の3点についてワークシートを用いてまとめさせた。ここでは、学生の

振り返りの内容から本時の成果を確認していく。

- ① 想像していた自分と実際に視聴した自分とのギャップはどのようなところにあったか。
- ② 本時の学修で得た気付きと、それを本番発表でどのように生かすか。
- ③ スマホを用いた学修の感想。

まず①については、「思ったよりも早口であった」、「想像していた声と違っていた」との音声に関する気付きが8名、「前を見て聴衆を意識していたつもりだが意外と目線が下」、「表情が暗い」「ヘラヘラしている」などの「発表態度」に関する気付きが12名であった。学生は人前で話す機会があっても、それを自ら視聴し、振り返る機会を持つことがほとんどないため、自身の話し方や声にかなりのギャップを感じたようである。また、話し手としての自分は意識してアイコンタクトをしているつもりでいても、他者の視点から動画を見返すと、意外とできておらず、出来栄えに対するギャップを感じた学生も多かったようだ。こうした経験をすることで、学生は何に気を付けて話すべきか、また自分の癖は何かなど、意識して本番発表に臨むことができる。それは以下に続く②におけるコメントにもよく表れている。

②では、「事前にたくさん練習して臨む」「スライドだけでなく、話し方の大切さにも気付いたので、声の大きさや緩急に注意したい」とのコメントがみられた。ここから、プレゼン発表上達のための練習の必要性や、プレゼン発表における話し方や発表態度の重要性について学生が身をもって理解できたことが分かる。

なお、③についてはおおむね好意的なコメントが多かったが、1つの教室で複数の学生が同時に撮影をおこなうため、他グループの声が気になるとの指摘があった。18名クラスであるため、普段使用している教室が狭かったことも影響しているだろう。これについては、広い教室や複数の教室を使用するなどの方法で改善していきたい。

3.本番発表への効果

3.1 本番発表の様子

以上の授業を経て、学生は本番発表を迎えた。ここでは2章で説明した授業内容が本番発表でどのように生きたかを報告する。

まず授業内容の効果があった点については、アイコンタクトの意識づけができたことが挙げられる。本番発表において話し手が原稿から目を離し、聞き手と視線を交わそうと試みているのは非常によく伝わり、授業での気付きを意識している様子がうかがえた。特に当該授業を実施していない必修学部クラスと比較すると顕著であった。ただし、アイコンタクトは意識してすぐに実践できるものではなく、上達のためにはまだまだ練習が必要であることは否めない。また、指し棒やレーザーポインター

を用いて、適度なジェスチャーが取り入れられていた点も授業の効果だといえるだろう。ジェスチャーもアイコンタクト同様に実践が難しい項目であるが、指し棒などの道具を用いることで、指し示すことへの意識が高まり、実践に結びついたといえる。

しかし、指し棒を必要以上に動かしたり、不自然な動きがあったりするなど、不要なジェスチャーが見受けられた発表もあった。これについては授業の影響が強く出過ぎた結果だろう。ただし、必修学部クラスではジェスチャーがほとんどない場合が多い。それと比較すれば意識が向いているだけよいといえるが、動きが多すぎて聞き手の集中を乱し、理解を妨げていたのは想定外のことだった。

以上のように、スマホを用いて動画を撮影し、自己を客観的に省みることは、発表態度に注意するという意識づけには大いに効果があった。しかし、特にアイコンタクトについては意識するだけでは実践が難しく、より高いレベルを求めるのであれば、撮影と視聴を繰り返す必要があるだろう。

3.2 学生の振り返り

授業内容が本番発表に役立ったかを学生に確認するため、第15回目の最終授業においてアンケート（無記名、選択・記述式併用）を実施した。なお、有効回答数は15件である。結果の一部を以下に示す。

①授業内容は発表態度を振り返るきっかけとなったか。

はい…13名、どちらでもない…2名、いいえ…0名

②本番発表では授業の反省点を意識できたか。

はい…9名、どちらでもない…6名、いいえ…0名

③授業内容は本番発表に役立ったか。

はい…14名、どちらでもない…1名、いいえ…0名

ここでは上記の回答をふまえて、授業の効果を確認する。

まず①では、「はい」が13名とおおむねよい結果となった。回答の具体的な理由も「自分が想像しているよりも上手く話せていないことが分かり、改善点を探すきっかけとなった」などのコメントがあり、発表態度を省みるきっかけとして本授業が機能したことが分かる。

次に②では、「はい」が「どちらでもない」をわずかに上回る程度であった。しかし、具体的な理由を確認すると、「はじめは意識していたが、発表が進むにつれて意識が薄れていった」「声の大きさは意識できたがアイコンタクトは意識できなかった」などのコメントが多い。つまり全く意識できなかったわけではなく、学生自身の目指す目標が高いために「どちらでもない」の回答が多かったといえる。

最後に③では本番発表を終えて、実際に授業内容が役立ったかを尋ねた。これについては「はい」が14名で、

「本番を想定したりリハーサルの必要性」に触れたコメントが多かった。ここから、発表態度は意識していても即座に実践に結びつかないことを学生自身が理解し、リハーサルの必要性に気付いたことが分かる。また、「自分の姿を見ることの新鮮さ」に触れ、よい経験ができたとのコメントや他のプレゼン発表でも実践したいとのコメントも多く見られた。以上のことから、学生は本授業をきっかけに、話し方や発表態度を省み、自身の癖や弱点に気付けたといえる。さらに、それらの気づきを把握した上で本番発表に臨むことができたため、全体的に学生の授業に対する満足度は高い結果となった。

4.今後の課題と改善に向けて

以上、本授業がプレゼン発表における話し方や発表態度の改善に効果的であることを示してきた。現代は学生のほとんどがスマホを所持しており、手軽に自身の発表動画を撮影し、視聴できる時代である。こうした機器を用いて自身を客観的に省み、練習を積むことが、プレゼン発表の上達には必要であろう。そのきっかけを得るためにも、今回のような実践を積極的に授業に取り入れていくべきだといえる。それでは、最後に今後の実践に向けて課題と改善策を述べてまとめとする。

本授業を通して、ジェスチャーは道具を用いるなどの方法である程度改善が可能な一方、それゆえに過剰になる場合もあることが分かった。過剰なジェスチャーを防ぐためには、動きの多さが聞き手の集中力の低下や分かりにくさに繋がることを実感するのが効果的である。したがって、授業内で他クラスの動画を視聴する際に、ジェスチャーのない発表だけではなく、過剰なジェスチャーのある発表を視聴させ、それらの問題点に気付かせることが必要となる。

また、アイコンタクトに関しては意識しても実践が難しく、練習を重ねなければ改善に繋がりにくいことが分かった。アイコンタクト上達のためには、「撮影→視聴→実践」を繰り返しおこなうことが効果的である。しかし、授業時間内でそれを実施することは現状として難しい。したがって、学生は授業時間外にそれらの練習、もしくは発表のリハーサルに取り組むことが求められる。積極的にリハーサルを実施させるためには、発表準備の工程にリハーサルを義務付け、その自己評価をワークシートにまとめて提出させるなどの工夫が必要となろう。

さらに今後は次のステップとして、口述原稿に文章ではなく要点のみを記載させるなどの指導も必要だ。手元の資料を音読する発表になるのは、口述原稿が文章化されていることに一因がある。ただし、記載された要点から話す内容を言語化することは初年次学生には難度が高いと考えられるため、どの程度の原稿を作成させるかは今後の検討が必要である。